

佳作

お互いの思いを大切に

京都府 京田辺市立大住中学校一年 稲葉 咲月

「ママはなんでもうちの気持ち分かってくれないの！」
当時小学五年生だった私はそう言って家を飛び出しました。

私の母は作業療法士として家から遠い病院のリハビリテーションで勤務しています。そのため、家に帰ってくる時間が遅くなる事が多くありました。昔の私は母がいなくて寂しい気持ちでいっぱいでした。

その日は家に一人で、疲れたから寝ようと横になっていたら、珍しく父よりも母の方が早く帰ってきました。「ママ、おかえり！」。その言葉を言おうとした時、

「あんた、また自転車カバーしてなかったでしょ。早くカバーかけてきなさい。」

と強く言われてしまい、私は黙ってしまいました。

私は眠たかったこともあり、そのまま横になってゴロゴロしていました。ですが、

「早く行ってきなさい！」

と怒られたので、私はカッとなって母に言い返ししました。

「別にカバーなんてつけなくてもいいじゃん！てかうち疲れてんの…。明日でもいいでしょ。」

と、起き上がりながら言いました。でも母が不満そうな顔をしていたので、私は言い放ちました。

「ママだって、いつも帰ってから寝てるじゃん！うちだって寝させてよ！」

と。母が何かを言おうとする前に私は目の前にあった家の鍵と携帯を掴んで家を飛び出しました。

ですが、その日は二十度を切るなど寒い日でした。家を出てきたものの、行き先がない私は家の外の壁にもたれかかりました。今からどうしよう、と思った私はとりあえず自宅の近くにあった祖父母の家に行くことにしました。走りながら今、母はどうしているんだろう、とふと思いました。私が寝たのが悪かったのかな、でも、寝るくらいいいじゃん、強く言うママが悪いんだ、と自分が正しいと気弱な気持ちを感じました。

祖父母の家についても、私はインターホンを押すことができませんでした。これは、母と私の問題だから、と手を下げました。そして家に帰る坂道を上っていると帰ってきた父と妹に偶然出会いました。流石に寒くなってきたので、父に事情を話して一緒に家に帰ることにしました。でも、母のことを直視することはできませんでした。その日は一度も母と言葉を交わすことなく一日を終えました。

朝、起きると父に呼び出されました。そして父から言われた言葉は、「ママも疲れてるんだぞ」と一言だけでした。私は朝ご飯を食べながらその言葉の意味を考えていました。

学校から帰ってくると、家には珍しく母がいました。私は、ただいまと言う前に「ごめんなさい」と謝りました。私は、自分の気持ちだけ優先して相手のことを考えずに行動していたことに気づきました。あの日、母から「自分の気持ちだけを優先したらあかんよ」と言われたことは今でも心に残っています。